愛知工業大学研究報告
第17号A　昭和57年

『ジェントルマン』概念過程における身体運動の史的研究 (1)

Th. Elyot の "*The Boke Named the Gouernour*" を中心として

山　田　岳　志

Ein geschichtliches Studium über die körperlichen und sportlichen Bewegungen für den Gestaltungsprizeß von dem Gentleman-Begriff (1)

über Th. Elyots Werk "*The Boke Named the Gouernour*"

Takeshi YAMADA

In diesem geschichtlichen Studium handelt es sich um Th. Elyots Gedanken über die körperlichen und sportlichen Bewegungen. In diesem Studium bedeutet es auch das Problem der Geschichte, die Entwicklung des Gedanken über die körperlichen und sportlichen Bewegungen für den Gestaltungsprozeß von dem Gentleman-Begriff zu erforschen und zu erklären. Aber diese Frage ist schon mehr-fach behandelt worden, und über dieses Thema liegen bereits mehrere Abhandlungen vor, trotzdem möchte ich sie hier noch einmal aufnehmen. In England ist es heute allgemein bekannt, daß man die Forschung nach der Entwicklungsgeschichte des Gentleman-Begriffs in England nicht missen kann, wenn man die Entwicklung der körperlichen und sportlichen Bewegungen in England in der frühen Neuzeit geistesgeschichtlich erforschen will. Die Wörter, wie zum Beispiel Fair-play, amateurism und sportmanship, sind die Handlungsweise und Denkensweise für das Gentleman-leben geworden. Um diesen Studiumshauptsatz zu erklären, handelt es sich um Th. Elyots "*The Boke Named the Gouernour*", und sind zunächt die folgenden vier Grundstandpunkte des Studiums anzunehmen. Im ersten Abschnitt handelt es sich um den Gentleman-Begriff für Th. Elyots Werk "*The Boke Named the Gouernour*", Im zweitten Abschnitt handelt es sich um die Klassenzugehorigkeit in diesem Buch. Im dritten Abschnitt werde ich über den Zusammenhang zwishen der Achtung gegen den moralischen Wert und der antiken Wissenschaft in diesem Buch handeln. Im vierten Abschnitt handele ich über den Zusammenhang zwischen der Achtung gegen den moralischen Wert und den körperlichen und sportlichen Bewegungen.

序　論

イギリスのルネサンス家達，エラスムス (Erasmus von Rotterdom, 1466～1536)，トーマス・モア (Thomas More, 1478～1535)，ロジャー・アスカム (Roger Ascham, 1515～1568)，リチャード・マルカスター (Richard Malcaster, 1533～1611) などの思想がイギリス近代体育の思想的構築に影響を与えたことは周知のこととされている。だが，本論で主題とするトーマス・エリオット (Thomas Elyot 1490～1546) の "*The Boke Named the Gouernour*" こそはその中にあってとりわけ影響が強かったものと思われる。と言うのはイギリス近代体育の思想的構築もさることながら，本論のもう一つの課題でもあるイギリス近代体育の実践者としての『ジェントルマン』の概念を解明すること，つまり思想的かつ実践的両面からのアプローチがされてこそまさにイギリス近代体育のアプローチが可能になってくるように思われるので

ある。『ジェントルマン』とイギリス文化，言うなれば『ジェントルマン』と身体文化との連想は，イギリス文化論としてはむしろ常識的な初歩に属すると言われている[1]。しかしながら，「イギリスのジェントルマンがその社会的実存の変化とともに歩んできたと目されるこのジェントルマンの言葉の文化史的」意味についてはさほど触れられていないことも指摘されているのである[2]。このようなことは体育史学的立場においても同様のことが言えると思われる。例えば，Gentlemanship が amateurism と同義的意味に使用されていたり，sportman が Gentleman とこれまた同義的に解釈されていたり，又特に "to play criket" とか Fair・play といった今日スポーツ的用語として使用されている言葉が当時そのまま『ジェントルマン』の日常生活における思考・行動の様式をも意味するものであったことを思えば[3]，『ジェントルマン』とイギリス文化，とりわけ本論の課題である『ジェントルマン』と身体文化との関連は，それを文化的，思想史的に追究することによってまさしくイギリス近代体育へのアプローチにもつながるものであろうと思えるのである。係るこのような目的において本論は従来の諸研究に若干の資料をもとにテーマへのアプローチを試みるのであるが，特に『ジェントルマン』理想の原型というものについて，その思想的構築に対して最も影響の強かったと思われるエリオットの "*The Boke Named the Gouernour*[4]" を中心にして今回はその内容に則して展開を試みた。

I

近世初頭，イギリスにおいていわゆる「ジェントリーの興隆」(The Rise of the Gentry) なる現象がみられたことを R. H. Tawney をはじめとする社会，経済史家達の諸研究は教示してくれるのであるが，それはまた階級性を容認した上での政治的，経済的かつ文化的なものを包括した史的現象でもあったように思われるのである[5]。さて，社会的変化に伴なう『ジェントルマン』理想の文化的変容についても従来より多くの指摘がされているのであるが[6]，『ジェントルマン』概念の形成についてそれがきわめてイギリス的『ジェントルマン』概念の形成に多大な影響を与えたと言われる G. Chaucer の文学作品からその意味するものを引用してみた。

> But, for ye speken of swich gentillesse
> As is descended out of old richesse,
> That therfore sholden ye be gentil men,
> Swich arrogance is not worth an hen.
> Looke who that is moost vertuous alway,
> Pryvee and apert, and moost entendeth ay
> To do the gentil deedes that he kan :
> Taak hym for the grettest gentil man.
> Crist wole we clayme of hym oure gentillesse,
> Nat of oure eldres for hire old richesse……[7]
>
> (Wife of Bath's Tale III, II 1109-1118)

G. Chaucer の『ジェントルマン』概念は，それが中世的文化理念を理想化したものであったにしても英語という言語によって初めて明示されたものとして重要なものであると言われている[8]。それまで『ジェントルマン』たる者への指標となっていたものが紋章をつけることを許された家柄の男子に限定されていたものが (a man of gentle birth)，社会的変化に伴ないその指標ともなるべき性格の変化は当然のことながら『ジェントルマン』概念に変化を与えた。「17世紀初めころになると，紳士 (Gentleman) という身分は以前のどの時代よりも流動的になっていることがわかる。今や血統も軍事的業績もそれだけでは資格とならず現に要求されている行動様式への同調ということが非常に顕著になる[9]。」，K. Manhein が指摘するようにもはや伝統的な『ジェントルマン』概念は，血統のよさ，軍事的業績といったものから脱し，今日言われるイギリス的シンボルを意味するようになったのは，まさに M. Weber のことばをかりればテューダー朝末期から社会的成長をとげてきた中産的生産者階層へとイギリスの市民社会建設の主導権が移行しつつあった時代，つまり，文化的にも経済的にも実力を畜えた市民階層が『ジェントルマン』階層に入りこんできた時期と合致するようにも思われるのである。さて，『ジェントルマン』概念についてそれが今日的意味で最も引用されるのは J. H. Newman の定義であろう。少々長くなるが今後『ジェントルマン』概念の考察を進めていく過程においてもきわめて示唆するところが多いと思われることからその箇所を引用してみた。

> Hence it is that it is almost a definition of a Gentleman to say he is one who never inflicts pain. This description is both refined and, as far as it goes, accurate. He is mainly occupied in merely removing the obstacles which hinder the free and unembarraused action of those about him : and he concurs with their movements rather than takes the intiative himself. . . . . the true gentleman in like manner carefuly avoids whatever may cause a jar or a jolt in the minds of those with whom he is cast : . . . . . all clashing of opinion, or collision of feeling, all restraint, or suspicion, or gloom, or resentment : his great concern being to make every one at

their ease and at home. . . . . He never speakes of himself except when compelled, never defends himself by a mere retort, he has no ears for slander or gossip, is sercepulous in imputing motives to those who interfere with him, and interprets every thing for the best. He is never mean or little in his disputes, never takes unfair advantage, never mistakes personalities or sharp sayings for arguments, or insinuate evil which he dare not say out. From a long-sighted prudence, he observes the maxim of the ancient sage, that we should ever conduct ourselves towards our emeny as if he were one day to be our friend. He has too much good sence to be affronted at insults, he is too well employed to remember injuries, and too indolent to bear malice. He is patient, forbearing, and resignea, or philosophical principles : he submits to pain, because it is irreparable, and to death, because it is his dastiny. If he engages in controversy of any kind, his disciplined intellect preserves him from the blundering discourtesy of better, perhaps, but less educated minds : who like blunt weapons, tear and hack instead of cutting clean, who mistake the point in argument, waste their strength on trifleo, misconcerive their adversary, and leave the question more involved than they find it. He may be right or wrong in his opinon, but he is too clear headed to be unjust : he is as simple as he is forcible, and as brief as he is decisive. Nowhere shall we find greater can dour, consideration, indulgence :[10]. . . . . .

J. H. Newman の指摘するところによれば,『ジェントルマン』にとって妥協，自制，寛容，そして言葉の洗練といったものが思考・行動様式の倫理的規範であったと言うのであるが，さらにこのような『ジェントルマン』の倫理的規範なるものは Public school での教育によってますます今日的意味の『ジェントルマン』概念を明確に教示してくれるのである。それはまさしく伝統的な道徳理念というものを指導原理にまで高めるものであり，そこで養成されるのは明らかに『ジェントルマン』になるための教育であり，Gentlemanship は支配者階層の道徳律にまで昇華されていったものと思われる。さて，イギリスにおいて19世紀の Gentlemanship はあらゆる階層に妥当するイギリス人の理想美，指導理念へと発展していったと言われている。しかしながらこのような『ジェントルマン』概念が歴史上，いかなる思想のもとに確立されていったのか，このことは合わせて問うならばイギリス近代体育の思想的構築が中世的体育を思想的にも近代化するような思想の確立がいかなる思想のもとで行なわれていったのだろうか。ここにおいてエリオットの "*The Boke Named the Gouernour*" こそはまさしく『ジェントルマン』概念はもとよりイギリスの近代体育の思想的構築に対して多大な影響を与えたものと思われるのである。

It wolde nat be forgoton that the lytell boke of the most excellent doctour Erasmus Roterodamus, (Whiche he wrote to Charles, nowe beynge emperour and than prince of Castiled) whiche book is imtituled the Institution of a christen prince,. . . . . [11]

このようにエリオットはトーマス・モアやエラスムスの思想に影響を受けながら，しかも当時の支配者階層に対して具体的教育論を展開していくのである。F. Caspari が指摘するように，テューダー初期のイギリスの『ジェントルマン』にはまだ Castiglione の「作法書」(courtesy books) は利用できるものではなかったし，かと言ってエラスムスやトーマス・モアの教育論は彼等にとってはあまりにも漠然としたものであったと言われている[12]。そして当時の『ジェントルマン』たちにとって必要だったものはエリオットによって満たされたのであり，エリオットの "*The Boke Named the Gouernour*" こそは1531年に出版され，50年間に8版をも重ねたほどのベストセラーであり，まさしくイギリスの支配者階層である『ジェントルマン』の指南書としてその役割を果したものと思われる。

II

さて，エリオットの "*The Boke Named the Gouernour*" がエラスムスやトーマス・モアの理想を具現化したところに当時の知的支配者階層に対して最も影響力を持った原因があったと言われているが，もう一つには当時のイギリス社会がそうであったようにエリオットの "*The Boke Named the Gouernour*" がとりわけ時代的にも中世的教育論と区別されるべき内容の展開であったことにもその原因があったと言えよう。ここで R. Ascham の言葉をかりて説明すればこうである。

In our forefathers tyme, when papistrie, as a standyng poole, couered and oureflowed all England, fewe bookes were read in our tong, sauyng certaine bookes of Cheualrie. as they sayd, for pastime and pleasure, which, as some

say, were made in Monasteries, by idle Monks, or wanton Chanons : as one for example, Morte Arthure, the whole pleasure of which booke standeth in two speciall poystes, in open mans slaughter, and bold bowdrye : In which booke those be counted the noblest Knightes, that do kill most men without any quarell, and commit fowlest advoulteries by sutlest shiftes.[13)]

R. Ascham が指摘するように，中世において支配者階層に読まれていた本と言えば，ある種の騎士物語（certaine Booke of Cheualrie）をのぞけば粗野でかつ武芸一筋の指南書のたぐいであったと言うのである。そして"Morte Arthur"についてもそれは公然たる殺りくと，女遊びの書にすぎない内容のものであり，著者がここで考えている気高い騎士とは口論もせず，徒らに多くの人々を殺害し，手練手管を用いて悪道非道の振舞に及ぶ輩のことである，と言うのである。このような状況に対してはエリオットにしても同様な考えをもっていたものと思われる。

whiche perchaunce they wolde nat do if they had ones layur to read our owne cronicle of Englande.[14)]

このようにエリオットは当時の『ジェントルマン』たちが学芸教養をたしなむことがなかったことに触れながら，しかも次のように『ジェントルマン』たちに期待するのである。

Nowe wyll somwhat declare of the chiefe causes why, in our tyme, noble men be nat as excellent in lernying as they were in olde tyme amonge the Romanes and grekes, Surely, as I haue diligently marked in dayly experience, the principall causes be these. The pride, avarice, and negligence of parentes, and the lacke or feweness of suffycient maystero or teachers.[15)]

エリオットは子弟の親，教師への不満もさることながら，そこには中世にはみられなかった古典的教養を身につけた教養人の育成を目指す意図がうかがえるのである。そしてここにはっきりとイギリス・ヒューマニズムの影響をみることができるのであるが，もはやイギリスの『ジェントルマン』は中世的色彩からルネサンス的教養を身につけた支配者階層として期待されてくるのである。そこには当時のイギリスのおかれた社会的状況をも反映していることは言うまでもなかろう[16)]。このようにエリオットの"*The Boke Named the Gouernour*"は中世を越えるべき当時の支配者階層に対して知的教養を身につけた『ジェントルマン』の育成について訴えたものであったと思われる。ではこのような意図をもった"*The Boke Named the Gouernour*"の内容はどのようなものであったろうか。エリオットはその著者の冒頭で次のように述べるのである。

And for as moch as this present boke treateth of the education of them that hereafter may be demed worthy to be gouernours of the publike weale under your hyghnesse,[17)]

つまりエリオットはヘンリー8世にあてた献辞の中で，この著書の目的が国王の下でやがては国家の支配者階層となるにふさわしい者についての教育について論じると言っているのであるが，このことからエリオットの"*The Boke Named the Gouernour*"の目的がいみじくも陛下のもとにあって支配者階層になるであろう『ジェントルマン』の育成を論じたものであったことがわかるのである。そしてエリオットはこうした支配者階層たる『ジェントルマン』の子弟に対する最高の教育形態についてこう言うのである。

In the fyrste shall be comprehended the best fourme of education or bringing up of noble children from their natiuitie, in suche maner as they may be founde worthy, and also able to be gouernour of a public weale,[18)]

エリオットにしてみれば，このような教育形態は国民大衆に正義を与えるためにも必要な方法であると言うのである。

it is expedient and also nedefull that under the capitall gouernour be sondry meane authorities, as it were aydyng hym in the distribution of iustice in sondry partes of a huge multitude,[19)]

さて，このようにエリオットにおける教育の対象がもはや当時の支配者階層の子弟にむけられていたことは間違いないであろう。そして，さらに彼の"*The Boke Named the Gouernour*"の内容について言えば，当時の中世的教育形態を批判しつつ，外来思想であるヒューマニズムの影響を受けて支配者階層の子弟の教育を試みるのであるが，そこにおいては当然ながらこれからの教育内容についてもそのことに触れながら論じていくのである。

And connynge, wherby onely man excelleth all other creatures in erthe, they reiecte, and accounte unworthy to be in their children. what unkinde appetite were it to desyre to be father rather of a piece of flesshe, that can onely mouse and feek, than of childe that shulde have the perfecte forume of a man,[20)]

このようにエリオットは完全に中世的教育形態との訣別をし，エラスムスやトーマス・モアによって影響を受けながらも彼自身の教育論を展開していくのであるが，エリオットにとっては新しい社会的，政治的かつ文化的エリートとしての『ジェントルマン』を想定していることから，その教育の対象者も一応は万人にその機会が与えられるとはしながらも次のように規定提起するのである。

> More oure where vertue is in a gentyll man, it commenly mixte with more sufferance, more affabilitie, and myldeness, than for the more parte it is in a persone rural, or of a very base linage : and whan it hapneth other wise, it is to be accompted lothe some and monstruous. Further more, where the persone is worshypfull, his gouernaunce, though it be sharpe, is to the people more tollerable, and they therwith the lasse grutch, or be dissobedient.[21]

このようにエリオットは徳性（virtue）というものが『ジェントルマン』に備わっている時，下賤で田舎者のような者の場合よりも寛容さ（sufferance），丁重さ（affability），温厚さ（myldenes）というものを持ち合わせているものである。そして一般に庶民というものは高貴な家柄の者による支配に対して耐えられるのであるが，下層階層より成り上がった者による命令には必らずしも快よく思わないものである，と言うのである。ここにして再度エリオットの "*The Boke Named the Gouernour*" における教育論がすぐれて階層的意味を含んだものであったことが推察されるのである。

> That every thing shulde be to all man in commune, without discrepance of any astate or condition,[22]

このようにエリオットにしてははっきりと秩序と階層（Order and degree）を意識して教育論を展開するのであるが，このような思想はエリザベス朝時代の詩人，E. Spencer をしてその作品の目的が『ジェントルマン』の徳性を説くものであったり[23]，又 W. Shakespeare の作品の中にもこのような目的を意味するところが散在するのであるが，とりわけその当時の思想的傾向をみるためにも "Troilus and Cressida" にみられる秩序と階層（Order and degree）について述べている箇所を引用してみた。

> 〔ULYSS.〕 Troy, yet upon his beses, had been down,
> And the great Hectors sword had lacked a master,
> But for these instances :
> The specialty of rule hath been neglected,
> . . . . . .
> The heavens themselves, the planets, and this centre
> Observe degree, priority, and place,
> Insisture, course, proportion, season, form,
> Office, and custom, in all line of order :
> . . . . . .
> . . . . . O,when degree is shakd,
> which is the ladder of all highddesigns,
> The enterprise is sick. How could communiies,
> Degrees is schools, and brotherhoods in cities,
> Peaceful commerce from dividable shores,
> The primogenity and due to birth,
> Prerogative of age, crowns, sceptres, laurels,
> But by degree stand in authentic place?
> And hark what discord follows.. . . .
> . . . . . .
> . . . . . Great Agamemnon,
> This chaos, when degree is sufforate,
> Follows the choking,
> And this neglection of degree it is
> That by a pace gone backward with a purpose it hath to climb. . . . . .[24]

このように，テューダー，スチュアート初期においてイギリス人を支配してきたのはまさにこのような支配の倫理でこそあったろうと思われるのである。そしてそこにみられるのは≪階級があって安定がある≫といったイギリス人の公理がすでに読みとれるように思えるのである。さて，エリオットの "*The Boke Named the Gouernour*" にみられる教育論がまさに中世的教育論とは訣別されるべき内容のものであったにもかかわらず，そこには又普遍的文化理念としての『ジェントルマン』の概念を説きながらも社会的，政治的，文化的エリートとしての階級性を示すものであったと思われるのである。

III

エリオットの "*The Boke Named the Gouernour*" にみられる教育論が当時の社会状況を反映するものであり，それがきわめて階層的色彩の強い傾向を示すものであることをみてきた。ここではエリオットの Excersise 論について彼の描写に則してその展開を試みる。ルネサンスのヒューマニスト達が『ジェントルマン』教育論を展開する時，必らず身体運動について論及しているのであるが，エリオットも同様に "*The Boke Named the*

Gouernour" において，第1巻の第XVIから第XXII章の実に7章までもそれに費やしているのである。さて，J. strutt や F. W. Hackwood が指摘するようにイギリスにおいて中世，ルネサンス期を通していわゆる庶民的身体運動，貴族的身体運動というものが男女問わず "Pleye" されていたことを諸々の文献から察することができるのである。例えば，whitemore が指摘するように G. Chaucer の諸々の文学的作品は中世レクリェーションの宝庫であり，"Merry England"がどのようなものであったかを理解できるほど中世的スポーツを教示してくれるのである[25]。さて，このように史的考察によって明示されてくる中世的スポーツに対してエリオットは "*The Boke Named the Gouernour*" においてどのような価値評価を与えたのであろうか。まずエリオットは第XVI章において『ジェントルマン』に対する身体運動の必要性についてこう述べるのである。

> All thoughe I haue hitherto aduaunced the commendation of lernyng, specially in gentil men, yet it is to be considered that continuall studie without some maner of exercise, shortly exhausteth the spirites vitall and hyndereth naturall decoction and digestion, wherby mannes body is the soner corrupted and brought in to diviers sickenessis, and finallye the life is therby made shorter : [26]

このようにエリオットは，通常精神活動だけで何ら身体運動の習慣を持たない者は，身体的なことは勿論そのために精神的活動すらも持続できなくなるとし，それに反して身体運動の習慣を身につけると（As Galence prince of physitions definith, ガレンを引き合いに出しながらも），それは身体を健康に保つばかりかさらには人との触合の場も提供してくれるのであると。さらに身体運動の習慣をもつことは精神的にも苦難をのりこえるための訓練にもなりえると言うのである。

> More ouer it maketh the spirites of a man more stronge and valiant, so that by the hardnesse of the members, all labours be more tollerable : by naturall hete the appetite is the more qwicke : the chaunge of the substance receiued is the more redy : the nourisshinge of all partes of the body is the more sufficient and sure. By valiaunt motion of the spirites all thinges superfluous be expelled, and the condutis of the body densed.[27]

エリオットはこのように身体運動の必要性を強調した後，次にはその身体運動についての種目やその方法，さらにはその価値について述べるのであるが，それはもはや単なる食物の消化を助長するといった身体的健康維持のための身体運動といった消極的側面からだけでなく，身体の強さ，たくましさ（strength and hardnes of Body），敏捷性，さらには身体運動の習慣を持つことがよいしつけをも養成すると言うのである。

> More ouer there be diuers maners of exercises : wherof some onely prepareth and helpeth digestion : some augmenteth also strength and hardnesse of body : other serueth for agilitie and nymblenesse : some for celeritie or spedinesse. There be also whiche ought to be used for necessitie only. All these ought he that is a tuter to a noble man to haue in remembrance, and as opportunitie serueth, to put them in experience. And specially them whiche with helth do ioyne commoditie (And as I moughte say) necessitie : consideryng that be he neuer so noble or valiant, some tyme he is subiecte to perile, or (to speak it more pleasauntly) seruant to fortune.[28]

このようにエリオットは『ジェントルマン』にとって身体運動の価値を認めた上で第XVII章においてはその各種目についての価値評価について述べているのである。さて，エリオットによれば身体運動のプログラムとして Wrastlynge, rennyng, swymmynge, horse-rydnge, huntyng, daunsings, shootyngs, tenese をすすめるのであるが，このような種目の価値評価として軍事的すなわち実用的な側面と，『ジェントルマン』にふさわしい品位を保つための，言うなれば D. Brailsford も指摘するようにテューダー朝時代における支配者階層が Castiglione の "Courtier" にみられるような身体運動を実践することで支配者階層としての思想的面目を保持しようと努めるためであったと思われる[29][30]。それに反してエリオットは『ジェントルマン』にとってふさわしくないプログラムとして，boulynge, claisshe, pynnes, koytynge, foote-balle をあげるのである。以下，各種目についてエリオットの描写に則して展開を試みた。

【Wrastlynge について】 イギリスにおいて，レスリングはあらゆる地方の年中行事の中で催し物として実施され，J. Sturtt はかつてのロンドンの市民はその熟練者であった[31]，と指摘するのであるが，エリオットにしてもレスリングについてこう言うのである。

> Wrastlynge is a very good exercise in the begynnynge of youthe, so that it be with one that is equall in strengthe, or some what under, and that the place be softe, that in fallinge theyr bodies be nat brused. There be diuers maners of

wrastlinges, but the beste, as well for helthe of body as for exercise of strengthe, is whan layeng mutually their handes one ouer a nothers necke, with the other hande they holde faste eche other by the arme, and claspyng theyr legges to gether, they inforce them selfes with strengthe and agilitie to throwe downe eche other, ... And undoubtedly it shall be founde profitable in warres,[32]

それは若い時期から始めるのにも非常にためになる身体運動であり，そして工夫次第では健康的に，さらには身体を強健にする意味においても有益な運動であるとし，何よりもレスリングの技を習得することは戦時において一種の武器にすらなると言うのである。エリオットはレスリングをきわめて実用的身体運動としてすすめるのである。

【Rennyng について】　エリオットは古代ギリシャ，ローマの例を引用しながらもこの種目についての説明をするのであるが，当時の有徳な人物と呼ばれていた人々は学問のみでなく，このような身体運動を通して困難を乗りきるための精神的，身体的習慣を養成したと言うのである。

Also, rennyng is bothe a good exercise and a laudable solace. It is written of Epaminondas the valiant capitayne of Theabanes, who as well in vertue and prowese as in lerninge surmouted all noble men of his teyme, that daily he exercised him selfe in the mornyng with rennynge and leaping, in the evening in wrastling, to the intent that likewise in armure he mought the more strongly, embracinge his aduersary, put hym in daunger.[33]

【Horse-rydynge について】　エリオットは乗馬の必要性を高貴なものの身体運動としてその価値を認めるのであるが，その理由はその運動を実践することが庶民に対して支配者階層に属する者の威厳と畏怖を与えるものであり，品位を保つということからであった。そしてエリオットはこの種目についてこう言うのである。

But the most honorable exercise, in myne opinion, and that besemeth the astate of euery noble persone, is to ryde suerly and clene on a great horse and a roughe, whiche undoubtedly nat onely importeth a maiestie and drede to inferiour persones, beholding him aboue the common course of other men, dauntyng a fierce and cruell beaste, but also is no litle socour, as well in pursuete of enemies and confoundyng them, as in escapyng imminent daunger, whan wisdome therto exhorteth. AIso a stronge and hardy horse dothe some tyme more domage under his maister than he with al his waipon : and also settethe forwarde the stroke, and causethe it to lighte with more violence.[34]

【Daunsinge について】　エリオットはダンスについて "*The Boke Named the Gouernour*" の中で3章をも費やしてその価値を説明するのであるが，当時支配者階層から男女の堕落につながると批判されていたにもかかわらず，Augustine に反ぱつしながらこう言うのである。

I AM nat of that opinion that all daunsinge generallye is repugnant unto vertue : al though some persones excellently lerned, specially diuines, so do affirme it, whiche alwaye haue in theyr mouthes (whan they come in to the pulpet) the sayeng of the noble doctor saincte Augustine, That better it were to delue or to go to ploughe on the sonday than to daunse :[35]

このようにダンスについて，エリオットはそれが堕落につながったのは正しいダンスのマナーが忘れられてしまったからであり，(the olde maner of daunsinge was forgoten)本来のダンスの持っている性質をもって実践するならば，それは容姿を美しくするのに役立つばかりか徳（prudence）を養成することにも役立つと言うのである。

I haue amonge all honest passe times, wherin is exercise of the body, noted daunsinge to be of an excellent utilitie, comprehendinge in it wonderfull figures, or as the grekes do calle them, I deae, of vertues and noble qualities, and specially of the commodiouse vertue called prudence, ...

I haue deuised howe in the fourme of duunsinge, nowe late used in this realme amonge gentilmen, the hole description of this vertue prudence may be founden out and well perceyued,[36] . . . . . .

【Tenese について】　加藤も指摘するように[37]，テニスはエリオットが価値を認めた唯一のボール・ゲームであった。エリオットはこの種目が若者にとって適した運動であり，しかも二人でプレイされるので工夫次第では shootynge よりもはるかに激しい運動であると言うのである。テニスに関する文献は，例えば W. Shakespeare の諸作品の中にも当時テニスが実践されていたことを教

示してくれるし[38]，またCastiglioneが指摘したようにこの種目はまさしくCourtierにとって最上の身体運動とされていたのである[39]。

> Tenese, seldome used, and for a little space is a good exercise for yonge men, but it is more violent than shoting, by reason that two men do play. wherefore neither of them is at his owne libertie to measure the exercise. For if the one stryke the balle harde, the other that intendeth to receyue him, is than constrained to use semblable violence, if he wyll retourne the balle from whens it came to him.[40]

さて，エリオットが"*The Boke Named the Gouernour*"において価値を認めた身体運動にはその他にswymmynge, huntyng, hawkyng, leapingがみられるのであるが，これらも又戦時における実用的身体運動として，又支配者階層のレクリエーションとしてその価値を認められるのである。さて，エリオットは第XXVIIにおいて『ジェントルマン』にとって無価値な身体運動について説明し，こう言うのである。

> Some men wolde say, that in mediocritie, whiche I haue so moche praised in shootynge, why shulde nat boulynge, claisshe, pynnes, and koytyng be as moche commended? Verily as for two the laste, be to be utterly abiected of al noble men, in like wise foote balle, wherin is nothings but beastly furie and extreme violence : wherof procedeth hurte, and consequently rancor and malice do remaine with them that be wounded : wherfore it is to be put in perpetuall silence.[41]

このようにエリオットは『ジェントルマン』にとって全く無価値な種目としてboulynge, claisshe, pynnes, koytyng, foots-balleをあげるのであるが例えばfoote-balleに関して，その種目の性質が故にこのような身体運動は支配者階層にとってふさわしくないものであると言うのである。foots-balleがこのように支配者階層にその価値を認められなかったことの史的記述については諸々文献からも推察されるのである[42]。さて，エリオットの"*The Boke Named the Gouernour*"にみられるExercise論は，彼の教育論を反映するような，すなわちきわめて階層的思想を反映するようなものであったということが言えよう。そしてエリオットがhuntyngやdaunsingeを実践することが必らずしも徳（prudence）とは相矛盾しないばかりか，それを実践する者にとっては徳（prudence）を養成することになるであろうと言う時，そこには支配者階層としての『ジェントルマン』にとって身体運動は支配者階層としての意識下のもとで目的に合致するような身体運動，つまり身体的技能以外に忠誠心（loyautie）とか礼儀（courtaysie）といったものが身体運動を通して発揮できなければならなかったと言えよう。

暫定的結語

イギリスの『ジェントルマン』概念において，とりわけ人文主義教育論を展開した者の中でもその影響力から言えばトーマス・モアのユートピア思想でなく，エリオットの『ジェントルマン』理想でこそあったろうと思われる。しかもその原因こそは16世紀イギリスのおかれた社会環境の中で指導理念とも言える『ジェントルマン』理想が，その思考・行動の様式においてまさしく支配者階層がいだいた指導理念に合致するものであったからこそと思われるのである。言うなれば，エリオットのヒューマニズムの受容の仕方，消化の仕方，すなわち16世紀イギリス社会への適合の仕方にこそ原因があったろうと思われるのである。今や騎士道倫理を基本とした『ジェントルマン』概念は，エリオットをくぐることによって封建的身分概念から普遍的文化的概念としてその後のイギリスの『ジェントルマン』概念を支配者階層に明示したと思われるのである。このような『ジェントルマン』概念の史的変容過程は，イギリス近代体育の思想史的追究にも重要な示唆を与えたものと思われる。例えば，16世紀テューダー朝時代の宮廷文化に密接な関係を持つであろうと推察されるamateurismこそはその近代的理念の形成過程において，エリオットの『ジェントルマン』概念にその史的原型をもうかがえるのである。そして支配者階層となっていく『ジェントルマン』を教育する機関であった"Public School"の教育方針，つまりそこでのスポーツ活動こそはまさにその目的に答えるべき役割を果してきたと言えると思うのである。

参考・引用文献

1） 越智武臣，「近代英国の起源」p.317，ミネルヴァ書房

2） Ibid, p.334

3） 飯塚訳，「スポーツと社会」p.196～197，不昧堂

4） Th. Elyotの"*The Boke Named the Gouernour*"についてはH. H. S. Croft版（two volumes,1883, London）を使用し，文中の"*The Boke Named the Gouernour*"に関する引用文はすべて本書に拠った。

5） トーニー著，浜林訳，「ジェントリーの勃興」p.10，未来社，岡田渥美，「Th. Elyotの『為政者』教育論とヒューマニズム」p.38. 京都大学教育部紀要XI. 昭

和40年.

6） R. Kelso, "The Doctorines of the English Gentleman in the Sixteenth Century." p.18～30, Univ. of Illinois Press, 1964.

7） F. N. Robinson, "The complete works of Geoffrey Chacer," p.85, second Edition, Oxford Univ. Press 1979.

8） トレバー・レゲット,「紳士道と武士道」サイマル出版会, p.85.

9） K. Manheim,「教育の社会学」p.82, 黎明書房.

10） J. H. Newman, "The Idea of University" p.179～180 (Discourse Ⅷ Knowledge and Religious Duty 10), Oxford, 1976.

11） "The Boke Named the Gouernour" I., p.95.

12） W. A. Wright, "English Works of Roger Ascham" p.230～231 Cambridge Univ. Press 1904.

13） 前掲書, Ⅰ p.99.

14） Ibid, I,p.98.

15） Ibid, I, p.90

16） 松浦高嶺「イギリス・ルネサンスの歴史的背景」p.232,（『英米文学史講座』2．ルネサンスⅠ）

17） 前掲書, I, p.CXCII.

18） Ibid, II,p.447

19） Ibid, Ⅰ, p.24.

20） Ibid, I, p.30.

21） Ibid, I, p.112.

22） Ibid, I, p.27.

23） Edmund, Spencer, "The Faeric Queene" p.15, Penguin Books 1979.

24） "The Riverside Shakespeare" p.455, Houghton Mifflin Company, 1974.

25） Whithmore, "Medieval English Domestic Life and Amusements in the Works of Chaucer, p.192, New York, 1972.

26） 前掲書, I. p.169.

27） Ibid, I. p.170.

28） Ibid, I. p.169～170.

29） Castiglione, "The Book of the Courtier" p.61～63 Penguin Books 1978.

30） STADION, p.245～247, V.Z. 1979.

31） J. Strutt, "The Sports and Pastimes of the People of England," p.80-81, London, 1833.

32） 前掲書, I. p.173.

33） Ibid, I. p.174.

34） Ibid, I. p.181～182.

35） Ibid, I. p.239～241.

36） Ibid, I. p.239.

37） 加藤元和,「近代初期における身体運動の史的研究」(3), 日本体育学会第27回大会号 p.88.

38） 前掲書, p.87.

39） 前掲書. p.61～63.

40） 前掲書, I. p.294～296.

41） Ibid, I. p.295.

42） 前掲書, p.82～84.

参考文献

○ "Legal Education of the Gentry at the Inns of Court, 1560～1640," Past and Present, No.38. 1967.

○ L. Stone, "The Educatinal Revolution in England, 1560～1640" Past and Present, No.28, July, 1964.

○ P. N. Siegel, "English Humanism and the New Tuder Aristocracy," Journel of the History of Ideas XIII, 1952.

○ John Dover, Wilson "Life in Shakespeare's England," London, 1913.

○ Maria Kloeren. "Sport und Record," Leipzig, 1963.

○ Dennis Brailsford, "Sport and Society," London 1969.

（受理　昭和57年1月16日）